HamaMed-Repository
浜松医科大学学術機関リポジトリ
浜松医科大学
Hamamatsu University School of Medicine

Comparison of percutaneous extraperitoneal closure (LPEC) and open repair for pediatric inguinal hernia: experience of a single institution with over 1000 cases

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2021-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三宅, 啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00003804

論文審査の結果の要旨

鼠径ヘルニアは小児外科分野で最も数の多い疾患の一つであるが、小児の腹腔鏡下鼠径ヘルニア根治術には腹腔内で内鼠径輪部を縫縮する腹腔内アプローチと腹膜外からアプローチして内鼠径輪の閉鎖を行う方法がある。申請者は、単施設後方視的研究として腹腔鏡下腹膜外閉鎖法(Laparoscopic percutaneous extraperitoneal closure: LPEC 法)と従来の鼠径アプローチ(オープン法)の成績比較を行った。

小児鼠径ヘルニアに対して 2003 年から 2008 年までにオープン法で手術が行われた 1050 人と、2008 年から 2013 年までに LPEC 法が行われた 1017 人を比較検討した。LPEC 法では術前診断側に加えて術中に腹腔内を観察して対側に腹膜鞘状突起の開存を認めた場合、無症状側にも予防的に手術を行った。

結果として、LPEC 法は手術時間や術中・術後合併症発生率、術後ヘルニア再発率においてオープン法と遜色なく、術後対側ヘルニア発生率は LPEC 法で男児、女児ともに有意に低下していた。LPEC 法における術中所見に基づく対側の予防的手術は安全かつ手術時間を延長させることなく、術後対側ヘルニア発生を予防できる可能性が示唆された。

審査委員会では、LPEC 法のラーニングカーブや男女児の成績の違い、麻酔も含めた手術の安全性やコスト等について議論がなされ、申請者よりそれぞれ適切に回答がなされた。LPEC 法による対側予防手術の必要性については、妊孕性など長期的な成績も含めて今後さらに検討していく必要があるものの、本研究は LPEC 法とオープン法を比較した大規模研究という点で高く評価された。

以上により、本論文は博士（医学）の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者　　主査　竹内 裕也
　　副査　中島 芳樹　　副査　川原 央好